

平成 25 年度 第 2 回
柏原市子ども・子育て会議
議事録

日時：平成 26 年 3 月 5 日（水）14 時～16 時
場所：柏原市健康福祉センターオアシス

参加者：川渕 良太 (柏原市労働協働組合協議会代表)
小松 孝至 (大阪教育大学教育学部准教授)
近藤 温子 (柏原市 PTA 協議会母親部会会長)
田中 昌之 (柏原市私立幼稚園代表 第二白鷗幼稚園園長)
谷向 みつえ (関西福祉科学大学社会福祉部教授)
永野 智江 (柏原市立保育所連合父母の会代表)
中野 美奈子 (柏原市市民代表)
西 育代 (主任児童委員)
西村 龍夫 (柏原市医師会代表)
福岡 雅子 (柏原市市民代表)
東森 哲也 ((株) ジェイテクト国分工場 工務部総務課長)
藤宇 敦子 (柏原市市民代表)
三木 賢蔵 (柏原市放課後児童会連絡会代表)

(事務局)

山角課長 (柏原市健康福祉部こども課)
杉本課長補佐 (柏原市健康福祉部こども課)
石橋係長 (柏原市健康福祉部こども課子育て支援係)
兼嶋主事 (柏原市健康福祉部こども課子育て支援係)
吉田係長 (柏原市生涯学習部社会教育課青少年係長)

(傍聴人)

1名

(欠席)

北畑 英樹 (柏原市民間保育園協議会代表 (かしわ保育園園長))

議事次第

1. 開会
2. 会長あいさつ
3. 委員の変更について
4. 議事
 - (1) 子ども・子育て支援に関するニーズ調査結果について
 - (2) 教育・保育、地域子ども・子育て支援事業の量の見込みの算出結果について
 - (3) 連絡事項
 - (4) その他
5. 閉会

会 議 録

1. 開会

【事務局 山角課長】

2. 会長のあいさつ

谷向でございます。前回、お集まり頂きまして、皆様の方から意見が出ました調査内容で、実際に調査して頂きまして、その結果をまとめて頂いたものが今回お配り頂いているもので、本日は、それについての説明ということですので、後から、ご感想などをお聞かせ頂けたらと思います。宜しくお願い致します。

まず、議事に入る前に、本日、傍聴許可について、委員の皆様におはかり致します。本日の会議の傍聴を希望する方がいますが、本日の議事の内容は特に個人情報などを配慮するようなものではないですので、公開で行っても支障はないものと考えますが、如何でしょうか。宜しいでしょうか。

【委員全員】

異議はありません。

【谷向会長】

ありがとうございます。それでは、傍聴を希望する方がいらっしゃいますので、入場して頂きます。どうぞ、お入り下さいませ。

3. 委員の変更について

【事務局 石橋係長】

委員の変更について説明

4. 議事

(1) 子ども・子育て支援に関するニーズ調査結果について

【事務局 石橋係長】

子ども・子育て支援に関するニーズ調査結果の説明

【谷向会長】

感想などお聞かせ頂きましたらと思いますけれども、如何でしょうか。

後の資料で出てきますが、子どもの数が減っている見込みになってはいますが、ご説明頂きましたニーズ調査結果の方ではご意見等はございませんでしょうか。

色々な調査でお母さんの意識が5年、10年単位で結構変わってきているデータがあちこちで出てきています。ほぼ子育てを終えつつある私と致しましては、特に0歳児、1歳児、3歳児のお母さんの外にどんどん預けたいという要望が非常に高いということを感じることができました。

【近藤委員】

お家で資料を見てきましたが、びっくりしたのは、資料の3頁のところの就労状況のところ、5割の母親が就労していますとありますが、そんなにお母さんが働いているんだなと思いました。幼稚園の3年保育をしてほしい、幼稚園の一時預かりの料金を下げてほしいなどと自由記述のところに書いてありましたが、やはり14時までだとなかなか働きに出られないので、少しでも働いていかないとならない人が増えているんだなと凄く感じました。

【谷向会長】

ありがとうございます。働かざるを得ないような時代に入ってきたということですね。

【西村委員】

この調査で世帯収入などは分らないですか。

【事務局 石橋係長】

世帯収入までは調査していません。

【西村委員】

そこがポイントかもしれませんね。回答率が半分ですので、割と上手くいっている家庭の人が答えていると思います。あまり上手くいっていない家庭の人は回答していないのではないのでしょうか。というのも、障害のある子どもを持っている人は物凄く不安を持っているはずで、障害について回答している人は1人だけです。本当に支援が必要なのは、上手いこといっている家庭ではなく、上手いことしていない家庭であって、この点はちょっとポイントとして頭に入れておく必要があると思います。

母子家庭か父子家庭かということはわかりますよね。そのような家庭が一番困っていると思います。資料3の6頁にひとり親が1.4%とありますが、こんなに少ないかなと思うのですが、皆さん、どう思いますか。

【事務局 石橋係長】

母子家庭、父子家庭で言いますと、就学前児童を対象とした調査では1.3%程度となっています。

【西村委員】

そういった世帯のお母さんのメンタルが非常に辛いですね。そのような家庭で育った子どもは、社会に対するインパクトが凄く大きいので、ちょっと時代の流れとして、配慮していかないとダメではないかと思います。

【谷向会長】

調査というものは、網羅しているようで網羅仕切れない部分が必要出てきますので、西村委員は日常の実感として、色々と感じられていると思いますが、如何でしょうか。

【西村委員】

要するに、メンタルが辛いお母さんは物凄くいます。うつ病であったり、気分障害であったり、その

ような家庭の子育てのレベルは物凄く落ちます。虐待されていたり、学校に行けない子どもは、大きくなって、意外に知的に悪くなかったりします。知的に悪い子どもは、可哀そうですが社会に与えるインパクトはそんなにも大きくありません。知的で、例えば、IQ90 や 100 ある子どもは、歪んで育つとかなりの社会的インパクトが大きくなります。その点は、意識しなければいけないと思います。車で突っ込んだりするなどの変な事件を起こす子どもは、案外頭がいいのですが、育ちが厳しいですね。

【谷向会長】

ありがとうございます。ニーズ調査の上で、市が今後、施策を考えていくと思いますけれども。器だけでなく、中身というものがニーズには必要かと思えますけれども、何か他にご意見ありますでしょうか。

【田中委員】

資料 2 の 16 頁、「不定期な幼稚園・保育所」とありますが、「不定期」とはどのようなことを言っているのでしょうか。

【事務局 石橋係長】

一時預かりや一時保育のことを言います。入園して、定期的に通われているのではなく、突発的な一時保育などを想定しています。

【田中委員】

預かり保育に毎日行くのではなく、時々行くということですか。これが不定期という表現ですか。

【事務局 石橋係長】

はい。調査票の問 25 がそれにあたる場所ですが、そこでは「私用、ご自身や配偶者の親、通院、不定期な仕事などの理由で、不定期に子どもを預けるサービスを利用し、幼稚園や保育所などの定期的な利用は除きます」となっています。

【田中委員】

預けたい人が希望した日に預かってもらえたら、それで良いということですよ。その場合、希望は満たされているということですよ。希望を満たされていないように感じたので、お聞きしています。

【事務局 石橋係長】

利用経験を聞いて、「預けたことがありますか」という問いですので、利用した、利用していないで分かれて、利用したら利用した理由を聞く、形になっています。

【谷向会長】

公園のところは、柏原市独自の項目ですが、物凄いニーズがあるという調査結果が出ていますけれども、これについて意見などありますでしょうか。

【三木委員】

ニーズの高い場所というのは、かなり整備されているところだと思います。反対に、利用していない地域については、定期的に見直しをして頂きたいと思います。

【谷向会長】

資料 2 の 37 頁の結果から言いますと、大正とか、法善寺とかが高くなっています。

【三木委員】

面白いですね。

【福岡委員】

私は、旭ヶ丘という少し多い地区に住んでいるのですが、近くに小鳩公園があるのですが、実際には子どもはそんなに来ないです。以前、私たちの子どもの小さいときの方が、親子で集いの場になっていた気がします。最近は働いている方が多いせいかな、午前中はほとんど子どもの姿を見ないです。小学生が学校から帰ってきて、自転車に乗って、遊んでいる姿は時々見ます。ですが、多いからと言って、頻繁に利用しているとは限らないかもしれません。私たちからすると、もっと広い公園で、遊具はなくても良いので小学生がのんびり遊べる公園が欲しい、その要望が最後に書かれている公園の整備をしてほしいところ、実際に利用はしているけれども、こちらにも書いているケースもあるのではないかと思います。実際、「ボール遊びはしないで下さい」という看板が立っていますし、そこで遊んでいると近所のおじさんやおばさんに怒られます。私たちも子どもにはボール遊びをしないように言っています。

【谷向会長】

子どもたちはどこで遊ぶのでしょうか。

【福岡委員】

子どもたちが遊ぶところが本当にはないです。ボールを使って、のびのびと遊べる場所がなく、小学校の校庭になってしまっていますが、それも、16 時に下校してから行くので 1 時間も遊べない状態で、それもやっぱり、学校から遠い子どもなんかでしたら行きにくいですし、実際、それを利用している子どもがどれくらいいるかとしたら少ないです。どうしても、子どもたちは外で遊ばず、家の中でゲームするようになってしまいますね。ボールで遊べたら、子どもたちは集まって、遊ぶのではないかなと思いますね。

【西委員】

福岡委員の意見の一つ付け加えますが、夏によく巡回をしているのですが、17 時や 18 時くらいは全く子どもがいない状態です。暑いから遊ばないのかなと思ったりもしますが、17 時や 18 時に巡回をしているときに、子どもたちに出会わないときがよくあります。外で遊ぶということに対して子どもたちはどのように考えているのか、ということが一つと、ボール遊びをしてはいけないという立て看板が設置されていて、子どもたちはここではできないからもういいやという気持ちになったりだとか、タバコの吸い殻があったりして、あまりきれいとは言いがたく、夜よくないことがあるのかなと思ったりします。

本来、公園というのは、午前中に子どもを連れてお母さん方が話しをし、午後から子どもたちが学校

から帰ってきて、遊ぶことなどをするためのものです。

遊具について、他の地区ではどうなっているのかなと私は思っています。私の法善寺地区では、ブランコがダメだとか、色々なものが×になったりだとかしていると聞きます。公園の充実とはどういう充実なのか、私たちの子どもときの公園のイメージがなくなってきているのではないかと思います。公園をつくる時に、どのように利用して頂くかというのを考えた方が良いのかなと思います。「作ってほしい、作ってほしい」と言われるのは、どのようなことを希望されているのかなと思ったりもします。

【谷向会長】

有効に活用されていないということですかね。整備次第では、もっと有効に使えるはず、かもしれませんね。

【藤宇委員】

国豊橋の下の児童公園、ヘリコプターが非常時に止めることができるあそこも、最初は「子どもたちが遊んでいい公園ができるよ」という噂が流れ、子どもたちも凄く期待していたものです。実際はそうではなく、緊急の場合とウォーキングのためにあるもので、子どもたちがボール遊びをする場所ではないと言われているみたいなのですが、そのような折角作って頂いた施設も、もう少し開放してくれる時間があつたら、子どもたちものびのび遊べるのではないかといつも思います。

柏原市は、ゲームセンターなどが無いからそのような心配はないと思いますが、他市の方に聞いたら、ゲームセンターなど、お金を使ってゲームするところに小学生のお友だち同士で行って、放課後過ごしている子どももいるようですので、今後そのようなことが心配だと思っています。

(2) 教育・保育、地域子ども・子育て支援事業の量の見込みの算出結果について

【事務局 石橋係長】

教育・保育、地域子ども・子育て支援事業の量の見込みの算出結果の説明

【谷向会長】

ご質問等、ございませんでしょうか。

【三木委員】

基本的な流れというのは、利用者を仮定して、それに見合った方策をとるということですか。

【事務局 石橋係長】

ここに出ている見込み量をどのように確保していくか、ということを計画していくものです。

【三木委員】

調査結果で利用者が少ないというのは、重大なことにはならないということでしょうか。

【事務局 石橋係長】

アンケート調査は、あくまでも量の見込みを算出するためにとったもので、算出した数字がもとになり、今後の整備計画を立てていきます。

【三木委員】

先程、西村委員がおっしゃったように、アンケート以外のことが重要な案件だと思います。その辺りを反映して頂けるような考え方を是非、盛り込んでもらわないと、何をしているのか分からなくなってしまうと思います。

【事務局 石橋係長】

その辺りは、今後この会議で議論して頂くところかなと思います。

【谷向会長】

皆様のここでもう出ましたご意見が、議事録として公表されていくと思いますので、ざっくばらんに意見をお聞かせ頂ければと思います。

【川渕委員】

もともと介護保険の制度から流用しているということですが、介護保険で言いますと、普通の量を見込んだ上で、色々な整備を計画し、それによって保険料が上がったりという制約があったりしますが、この計画で量を見込んだ分については、そういった制約は無しに、見込んだ量を整備に当てることができるのでしょうか。

【事務局 石橋係長】

保育料については、現在、国の子ども・子育て会議で単価は出ていませんが、国から示されたものをもとに市独自で設定することができます。今、現在も国で示されている保育料の7割分ぐらいしか、柏原市は頂いておりません。本来、国がこれだけとるべきと提示する額よりも、細かく細分化して、市の財源で安く頂いております。国からどれくらいの基準が出てくるかはわかりませんが、これから検討していくことになります。

【小松副会長】

ちょっと確認をさせて頂きたいのですが、今、計算をされたのですが、市独自でされる計算の数値はどれで、国が定めた手続きで絶対に守らなければいけない手続きがどれで、計算式がどれで、市独自で数値、計算の仕方を決められるものはどれか、国からどこまで強制されているのか、ということをお教え下さい。

【事務局 石橋係長】

保育料については、ここには載せておりませんが、ここに載っている分については、手引きに従って算出したものについては変えませんが、これをもとに整備計画を立てていくことになります。

【小松副会長】

たとえば、ここに出ていない数字をどう拾うかなどについて、考慮する余地というのは無いのでしょうか。

【事務局 石橋係長】

それは大丈夫です。

【西村委員】

話しを総合すると、2歳までの小さい子どもの保育施設がなく、3歳から5歳の大きい年齢の保育所はあるということですよね。2歳までの保育所については急いで行わないといけないと思いますが、はっきり言いますと、将来、子どもの人口が減るので、今、つくっても経営的に上手くいかないことは当たり前です。それを「つくれ」と言われてもなかなか厳しいですね。私のところも、つくろうかなと思っていましたが、これはやっぱり破綻するなと思ってやめてしまいました。民間の小さなところはなんとか確保して、小回り効くようにしておいて、大きいのをつくったらまたそれは財政が厳しいですよ。個人的な感想ですけども、少し、補助金を出す位が良いのではないのでしょうか。

【事務局 石橋係長】

あくまで、推計ですので、市が魅力な施策を打って、子育て世帯が増えることを我々は望んでいます。この数字だけでみますと、かなり減っていきますので、西村委員がおっしゃるようにただ単に施設が増えるだけでは難しいと思っています。

【西村委員】

公園の話が出ましたけれども、モノにお金をかけない方が良いと思いますけれどもね。ソフトパワーにかけた方が良いと思います。これから、子どもも減るし、子どもを生む世代が物凄く減りますよね。これについては、どうにも避けることができないらしいので、これ以上に減るのではないのでしょうか。

【田中委員】

資料3の7頁のところで、平成27年度から31年度で、1号認定から3号認定をみますと、だいたい1割位減っています。3号も1割程減っています。数値的には働きたいという人がたくさんいます。だけれども、ここの計算方式は、3号認定の量が増えているのなら分かります。1号の方が専業主婦、教育だけの人は減ってくる可能性が強いですよ。働きたい人がいるのに、なんでだいたい1割なのかなと思います。これは5年程ですけども、10年を見れば、もっと働く人は増えてくるのではないかと思います。働かざるをえないケースも世の中は要求しているのではないかと思います。この数字は、甘いのではないかと思います。

【事務局 石橋係長】

利用希望以上に人口減少が激しいのが影響しています。アンケート調査では、就労したい、子どもを預けたい希望は多かったですけども、算出の方法として、まず人口を推計しなければならないので、働きたい、子どもを預けたいと思っている人以上に、人口が減っていくことが影響しています。

【田中委員】

同じ比率で1号から3号まで減っているんで、そこは違うのではないかと思います。この数字は、アンケートの数字と少し違うのではないかと思います。

【事務局 石橋係長】

国はこのやり方を提示し、そのやり方での数字となっています。

【田中委員】

資料4では、0から2歳児の待機児が柏原市にはこれだけ出てくるであろうという数字ですよ。

【事務局 石橋係長】

これは保育所に入所できる月の就労時間を64時間以上として算出しています。今は月80時間ですので、実際はこの数値よりも少なくなると思います。また、平成27年度からすぐに64時間に下さいということではなく、経過措置として段階的に変更することになるかと思っています。

【田中委員】

0、1、2歳児の施設は不足ということになるのでしょうか。

【谷向会長】

この数値だけみていたら、5年間を乗り切ったら、低年齢児もなんとか乗り越えていけるのではないかということになりますか。

【西村委員】

保育所行政があった方が、働くお母さんは住みますよね。小さい子どもを連れて、住んで欲しいので。それは確かにありますが、見通しが悪いので、経営状態が悪化するのではないかと凄く思いますね。どのように考えていますか。

【事務局 石橋係長】

何か暫定的に広げていく方策の方が良いのかなとは思っています。

【西村委員】

何億もかけて建てたら、大変なことになりますね。

【事務局 石橋係長】

何か、次に転用できる施設にしてもらうだとか、社会福祉法人が建てるのであれば、高齢者の施設にいずれ転用できる建て方にしてもらうとか考えていく必要がありますよね。

【西村委員】

箱物で考えるのではなく、周りで預かってもらうなど、子育てが終わった世代に預かってもらうなど、そのようなアイデアで対応していった方が良い気がします。

【事務局 石橋係長】

家庭的保育や保育ママなどもありますので、そのようなものを視野に入れながら進めていきたいと思っています。

【田中委員】

第2号については、まだ余裕がありますよね。ですので、それを活用する方法が一番柏原市に合っているのではないのでしょうか。

【事務局 石橋係長】

そこに低い年齢をあてていくということですか。

【田中委員】

そうですね。そのようなノウハウを持った者がして頂いた方が良いような気が私はします。

【藤宇委員】

0歳から2歳までの子どもがたくさんいらっしゃることは、若いお母さん方が産んだときに子どもを預ける場所がないから産まないという方も多く見られると思います。0歳から2歳までの子どもは、しゃべらないし、泣くし、夜中も起きるし、という形で結構ストレス溜まっているお母さん方がいると思います。今、おっしゃったように、余っているところの施設で、3歳から5歳のところで融通を利かせていくことが、一番、無難な解決策だと思います。

【事務局 石橋係長】

上手くそこにはめられたら良いのですが、年齢クラスごとの教室みたいな形で保育していますので、その中に低年齢児を入れることはできません。また、施設面の問題もあります。

【谷向会長】

充実してきたら、その充実した施設を目的に転入ということも考えられるでしょうし、それから、何よりも子どもが健やかに育つようにソフトの充実ということも視野に入れていく必要があります。箱物とか、数さえどうにかなれば良いということではなく、やはり内容を充実させていかないと、西村委員がおっしゃったみたいに、お母さん方の不安が今結構あります。また、ニーズ調査報告書（資料2）の15頁のところ、年齢別にみますと、0歳児のお母さんが、子どもが病気やけがのときに子どもを預けたいというような利用意向が物凄く高く、8割以上になっています。0歳児の赤ちゃんを病気のときに、預けたいというお母さん方の気持ちというのが、0歳児なら手元に置きたいのではなく、0歳児だったら子どもが病気のときに預けたいという、この変化というのは凄く、0歳児のお母さん方の不安の高さというのが、「どうしたらいいんだろう」という心の叫びが表れていると思います。このような、意識面、ソフト面の変化というのを満たすようなことも同時に考えていく必要があると思います。

【近藤委員】

この点については、私もチェックしたのですが、勤めている人が答えていますよね。子どもが病気やけがのとき、母親か父親が仕事を休んだ人のためのものですので、0歳児は本当にしょっちゅう、熱出したりだとかしますので、今日休んで、また明日も休んでということがありますし、先月も休んだのに来月も休まないといけないみたいに、自分ばかり休まないといけないみたいになってしまって、結局、会社を辞めさせられそうになっていることもあります。そのようなことから、0歳児のニーズが高いのではないかと感じています。

【西村委員】

私は、病児保育をやっているのですが、0歳児は感染症などが多くないので、意外と少ないです。一番多いのが、感染症が多い2歳から4歳です。

これは、お母さんの焦り感が出ているんですね。0歳で、ガッツリ仕事をしているお母さんは少ないですけれども、将来、半年後、仕事をしているとき、子どもを預けるところを絶対確保していきたいという焦りが出ているのではないかと思います。1歳からどんどん下がっていくのは、その解決がある程度できてきて、友だち同士に預かってもらう、親に預かってもらうなど、0歳児はそのような手段が少ないのではないかと思います。

【田中委員】

私は幼稚園をやっているのですが、今日もインフルエンザが流行ってしまして学級閉鎖、前のときはB型で学級閉鎖、今度はまたA型で同じクラスが学級閉鎖という事態が起こっています。それは3歳からのことですが、0、1、2歳児についてはどのようなのかと考えますと、その内に1歳ぐらいまでは育児手当が出るだろうと思います。国のことですからわかりませんが、そのようにしていかなければ、保護者と子どもとの距離が離れていきますので、国としては、それはマズイと考えます。若いお母さんは子どもの育て方がもう一つ分かっていないかもしれません。学校で教えてもらっていないかもしれません。男性からみれば、せめて1歳までは手元に置いて頂いて、1歳から預けるというシステムを考えていくべきではないかと思います。0歳児については、あまり考えない方が、私は柏原市としては良いのではないかと思います。これについては、ニーズ調査と違うことを言っているかもしれませんが、柏原市の風土に合っているのではないかと私も思います。ですので、柏原市は0歳はお母さんの温もりの中で育ててもらうのがベストではないか、という考えを持たれるのも良いのではないかと私は思います。

他のことになりますが、今、幼稚園は3歳児からやっており、柏原には私学は私のところと関西女子さんと2園あります。2歳児をどのように受け入れしていくのか、認定こども園の方に向かっていくのか、それなりの市の体制がまとまってくれば私学もそちらの方に向いていく可能性があります。世の中がそのように向かっていますし、アンケートを出したということはそもそもその方に向きなさいということですので、いつでもそのような体制を取れるようにしていこうと思っています。ただ、4歳、5歳に比べたら、3歳は非常に経費がかかっていきますので、それなりに保育料が高くなったりするのですが、2歳の受け入れをするのなら、そのこともプラスアルファとして考えていかなければ、私学として難しいです。大阪府も、国から熱心に聞いてきて、市町村や我々に通知していますので、大阪府は必至だと思います。私学の幼稚園をどれだけ認定こども園に持っていくのか、でもそれは市町村があつてのことです。市町村が体制を取れなかったら、私たちは向いていけません。待機児の問題も、2歳は解決が早いかもしれませんが、1歳はまだ向いていけない。それは市の体制が見えないからです。ですので、市の動きによっては、皆が変わってくると思います。その辺りも、子育て会議で審議して頂きたいと思います。

【谷向会長】

資料4を拝見致しますと、そんなに施設をつくらなくてもいいような単純な結論が出てしまいますけれども、そうではなく、今後移行していく中で、本当に求められているのは何かという色を、またここでご意見頂き、その方向に向かって有効に改革が進んでいくと思います。

【福岡委員】

公立の保育園というのが認定こども園に向かっているのですか。

【事務局 石橋係長】

公立ですので、市がどのようにやっていくかということですね。幼保連携の認定こども園というやり方もありますし、今後検討していくことになります。

【福岡委員】

検討していくというのは、いつですか。

【事務局 石橋係長】

制度自体が平成27年度からスタートしますので、平成26年度中には考えていかないと、と思います。

【谷向会長】

他にご意見ございますか。

【西村委員】

田中委員がおっしゃったようなことに似ているんですけども、方向性というのはやっぱり、子どもが病気のときは、親は仕事を休むべきだと私は思います。病児保育を運営しておきながら、自分のところを潰すようなことですが、やはり、育ちということを考えると、子どもは小さい内に何回も感染症を起します。1年に3回か4回か熱を出して当たり前です。やっぱり子どもは熱が出て辛い、そのようなときに母親の看病が必要です。そこできちんとアタッチメントでき、信頼関係を構築していきます。自分が辛いときにはやはり頼りたいんじゃないですか。母親がいて、きちんと頼って、看病してくれる、それが一番大事ですね。それを預けてしまうと問題があると思います。とは言え、現状は仕方ないですが、収入を確保しながら親御さんが休める体制を構築していくことが必要だと思います。これは、市のレベルではなく国のレベルだと思いますが、そちらの方向に進まないと子育てというものは良い方向に進んでいかないと思います。

【西委員】

西村委員がおっしゃったように、子どもが病気のときは、母親や家族が温かく抱きしめてあげるのが一番だと思います。そのようなことが難しいお母さんがたくさんいらっしゃいます。お母さんに対しての支援、昔はご近所の方であったり、おじいちゃん、おばあちゃんが近くにいたりして、どうしようどうしようという中で相談にのってもらいましたが、今はそのようなお母さんは少なく、お母さんがパニック状態になってしまったりだとか、色々あるかと思います。

先程、おっしゃったように、お母さんの支援やパパの支援などを充実していくことが必要かと思いません。

【藤宇委員】

ファミリー・サポート・センターについてですが、これも壁が厚く、結構、私たちの母親世代、50代や60代の子育てが終えた方々が子どもをあやすなど、そういう方たちがさっといけるようにもって

門戸を広げて、いざ、お母さんが困ったときにお家に行ってあげたりする制度をもうちょっと柏原市の中で決めて頂いたら、働ける方も増えますし、そのような必要とされる方も増えていくのではないかと思います。

【谷向会長】

ファミサポができて、10年以上経つと思いますが、意外と伸びてなかったですね。

【藤宇委員】

どのように会員になったら良いのかがよくわからなく、少し見てみたら、まず会員になって、何かの説明会に出て、それで登録しないといけないなど、色々書いてありました。どのような感じで市民に浸透しているのか、心配です。どれくらい会員っていらっしゃるのですか。

【事務局 石橋係長】

今、手元にその資料はないので、詳細にはお答えすることはできません。

【藤宇委員】

前から良い制度だなと思っていて、自分にできることがあったらなと思っています。

【事務局 石橋係長】

会員には、援助会員と利用会員があり、援助する側は登録してもらって、研修受けてもらわないといけないのですが、預けたい側、利用したい側は登録だけしてもらって、いざ利用したいとなったときに、間にコーディネーターが入って、利用していくことになります。

【藤宇委員】

それは、1週間前とか期限などあるのでしょうか。急に必要になったときも利用できるのでしょうか。

【事務局 石橋係長】

それは、援助会員さんのご都合にもよりますが、協力できる方が見つければ利用できます。利用にあたっては、事前の登録がいりまして、まずは登録してもらって、そのときにお話してもらうことになります。利用したい方の登録はそんなにハードルが高いようなものではないと思います。もう少し、広報に力を入れた方が良いかなと思います。

【中野委員】

ファミサポを利用して下さいとかが来るのですけれども、やはり日本の子育ての制度として、ちょっと壁を感じます。見知らぬ人に子どもを預ける、特に、障害のある子どもは気軽に預けることができないと思います。まずはお試しという感じで、1歳6か月健診、3歳6か月健診のときに、3回ぐらい無料をやって頂いて、お試しで、「無料だったらやってみようかな」とか、「買い物行きたいからちょっと預けてみようかな」とか、利用する機会が増えたらそのまま継続につながるのではないかなと思います。お金もかかって、全然知らない人に子どもを預けるといのは、抵抗があります。

【西委員】

一度使われた方の感想などを聞かせて頂けたらわかりやすいかなと思います。

【福岡委員】

八尾で事故がありましたよね。あれから、私も凄く怖くなりました。以前は、子どもがある程度大きくなったときに、受け入れするというのもやってみたいなという気持ちを持っていました。八尾の事件は、子どもさんが亡くなっており、預かる方も凄く責任重大だなんて思うようになりました。何があるかもしれませんので、あれ以降、私は預かれないなと思うようになりました。逆に預ける側の方も、自分の子どもを他人に預けるので、何が起こるか分からなく、後で後悔したくないなと思ってしまうと、預ける立場になると預けるのをちょっと躊躇してしまうなと思ってしまいます。

あの事件以降減ったことがないのでしょうか。

【事務局 石橋係長】

顕著には出ていないと思います。数字には出ていませんが、どちらの側からも敬遠するだろうなどは個人的には思います。

【福岡委員】

むしろ、預かる側の市で研修を行って、市の方で口頭だけの打ち合わせだけではなく、色々な知識を持って行っていかなければいけないのではないかと思います。

【谷向会長】

子育て家庭だけではなく、援助するご家庭、色々周知していく必要が一つ考えられますし、ファミサポが上手く運営するように、そのようなソフト面も考えていく必要があるかもしれません。だからこそ、乳幼児をお持ちの家庭にアプローチしていくファミサポ以外にも、色々アプローチしていく方法、色々なソフトの面を、子育て世代だけではなくて、もっと違う世代を交えて考えていく必要があるのではないかと思います。

【三木委員】

預けられる側の専門性というのが非常に求められると思います。対価が案外少なく、求めるだけ求めて、対価が全然整っていない状態であり、今の学童もそのようなことが見られますので、対価についても見ていかないといけないと思いますね。

【西村委員】

ファミサポが上手いかなのは、横のコミュニケーションが少ないからだだと思います。知らない人に子どもを預けられませんか、知らない子どもを預かりもしませんので、そのコミュニケーションをどのようにしていくかですよね。責任は必ず市にあって、トラブルは絶対ゼロではないので、保険は必ずかけておいた上で、マッチングしないといけないと思います。地域でこの人がちゃんと預かってくれる、全然顔を知らないが無理なので、顔写真付きのプロフィールを配って、人となりが分かっていたら預けやすいと思います。この辺りは、工夫が必要ではないでしょうかね。

【谷向会長】

本当に横のつながりをつなげるというのは難しいですね。地域のつながりというのを。

【西村委員】

それができれば、地域のつながりもできますし、社会全体が良くなるのではないかと私は思っています。子どもが中心となってつくっていくことが必要だと思います。

【谷向委員】

子どもが育つのに必ず必要ですよ。

【藤宇委員】

話しが変わりますが、小学校の学童の施設についてお聞きしたいのですが、指導員一人につき、何人ぐらいの生徒をみていますか。学年ごととかに分かれているのですか。

【事務局 吉田係長】

一クラス、40名が基本となっております。そこに複数の指導員がおり、2名の指導員で40名の児童をみています。一人あたりの指導員に対し、約20名の生徒をみていることとなります。少ないところはもっと少なく、2名の指導員で30名みているところもあれば、極端に、堅上であればかなり少なく、非常に強い保育になっている状態です。

【谷向会長】

他にご意見等ございますでしょうか。

【小松副会長】

最初に説明して頂いたのは「量」のことで、何人足りないかということで、そこから出して頂いたのは、どのような「質」で子どもたちを育てていくか、たとえば、お母さんを支援しますとなったときに、なかなか理解されるのが難しく、それは保育される方とか、専門家の方とか、行政の方とか、関係をつくってはじめて出来上がっていくことだと思います。量のこと、プラスで「質」をどのように、単に資格があればいいとか、何年経験があればいいとかではない部分が大きいと思います。その辺をもう少し詳しく考えて、施策を細かく決定していくことが重要であると話しを聞かせて頂いて思いました。

【谷向会長】

幼稚園や保育所の中だけでなく、まさに地域の受け皿の質というのを考えていく必要があると思います。

他のご意見、ございますか。

(3) 連絡事項

【事務局 石橋係長】

平成25年度の会議につきましては、本日が最後になります。平成26年度につきましては、4月以降、計画の策定にあたり、更に頻繁にお集まりいただいて、ご意見をいただきたいと思っております。日程について

は、また会長、副会長の日程をお聞きした上で設定していきたいと思います。

4月の後半、ゴールデンウィーク前に第1回をさせて頂きたいと考えております。ペース的には月1回のペースで、お願いしたいと思っております。

【西村委員】

次はある程度の形が出てくるのでしょうか。

【事務局 石橋係長】

次世代の実施状況なども報告させて頂きます。また、方向性や圏域など、決めて頂かないといけないこともありますので、その辺をはかって頂きたいと思っております。

【谷向会長】

それでは、ご意見ないようですので閉会させて頂きます。

【小松副会長】

本日は、色々貴重なご意見が出たと思いますので、来年度は頻繁になるということですので、宜しくお願い致します。